

文明と文化

～それぞれの視点からの農業～



渡部忠世

(京都大学名誉教授・アジア太平洋農耕文化の会代表)

昨年9月11日夜、アメリカの同時多発テロ事件のテレビ映像を見ていて、とっさに、近代文明というか工業文明というか、今まで世界に君臨していたひとつの巨大な文明像が文字通りに瓦解していく姿、その終焉の図であるかに思った。

なぜそう思ったかを理路整然と説明しつくすのは易しくないが、たまたまその夜も、私は松井浄蓮さんや吉野せいさんの小農に徹しられた清貧の生涯のこと、これらの人たちが引き継いでこられた日本の農耕文化のこと、さらにその対極に位置するような近代(工業)文明、その高慢と専横のことなどを考えて文章にしている時であった。そのせいもあってだが、この事件を、ひとくちでいって文明と文化との相剋の局面としてとらえてみることにあまり戸惑いがなかった。

それから2か月ほどたってからだが、ある研究所の主催する21世紀における世界の農業、食糧生産、環境問題などについての座談会に出席した。その席でも、テロ事件の後遺症のことが話題になって、農業をめぐる世界の今日的状況、WTO体制や農業のグローバル化ということなどが、やがて今までとは違った方向へと向かうのではないかと議論された。たとえばグローバル化ということだが、よく考えれば、西欧的文明観の論理に多くは発して、今後も貧しい人はますます貧しく、富める者はますます富むという世界的な構図

を長期的に正当化させる手段にすぎないように思われるのだが、こうした西欧文明のいわば贗(おご)りの姿勢が、こんなショッキングな事件を契機にしたのは不幸だったが、次第に説得性や影響力を失っていくのではないかと出席者の何人もが同じように考えた。

農業は、いうまでもないが、土地ごとに異なった姿をとって、その土地独特の生き方の形式として定着してきた。アジアもアフリカも、当然のことに中東もアフガンもまさにそうである。その意味において農業とは本来が地域の文化であり、民族伝統の文化であり、それゆえに、すぐれて精神の文化としての性格をもって成立してきた。

これに対して、文明とは都市文明、物質文明、機械文明などという表現になじむように、合理性や機能性を特に強調するところの、より普遍的な価値の体系としての性格をもってきた。このような場合の「普遍」とは、時として「侵略」と読み替えてもおかしくない。従って、そうした文明的視点や手法を一方向的に世界の農業へ適応し拡大しようとするのは、一般的には西欧的農業のもつ価値観の他者への押しつけに他ならない。その結果、それぞれの土地に発達してきた固有の文化体系を否定し衰弱させることが多く、当然に、そこには衝突が生じる。今回のテロ事件の深く根底の部分にこうした文化と文明の相剋をみるというのが私の考えである。



攻撃を受けたワールド・トレード・センタービル

「固有の文化体系を否定」ということだが、世界的にみた場合に日本ないし日本人はひどくこれに「寛容」であったように思われる。詳しく振り返って述べる余裕はないが、アラブの諸国や南アジアの国々などと比較すればその差はきわめて瞭然としている。明治以降のわが国農業の「近代化」の歩みとは、主にはこうした西欧的普遍的な文明の受容を非西欧諸国の先頭をきって進めた結果に他ならないといえよう。

昨年10月、本会が催した西ブータンへの短い旅行(「西ブータンの文化・生活・農耕を訪ねる旅」)から、私たちはこの点についても非常に多くのことを具体的に学んだと思う。民族の文化の豊かな伝承と近代文明の節度ある受容の共存が(その必要性を多くの人が真剣に考えることを前提にしての話だが)決して不可能でないことを、この国の人々は示してくれた。素晴らしいことだと思ったが、詳しい見聞の記録は本誌の別の稿にも書かれると思うのでここでは述べないでおく。

わが国の場合、明治の「文明開化」から約130年を経過して、文明の余得をあり余るほどに受けたと同時に、文化の損失が致命的、一といえるほどに膨大であったことに気付き始めている日本人も少なくない。今やひたすらな文明の進展よりも、文化の深化こそが人間の「しあわせ」を支配する新しい時代が変わる—そんな予感を私たちが強く感

じるのも当然なことのようなのである。文化の視点から農業を、そして新しい世界像や人間像を考え直して必要不可欠のように思う。そうした未来に向けて、もう一度わが国が世界の先頭をきって進むような時代がきてほしい。

(『農林水産図書資料月報』53巻2号所載を一部改稿して転載)



アフガニスタン難民たち